

植物油に関する最近の研究動向

国際領域 上席主任研究官 樋口 倫生

植物油は、食料分野にとどまらず、国際貿易、環境問題、エネルギー利用など多様な領域と結びつく重要な産品です。その生産・流通・消費構造は、国際政治経済や市場動向、消費者行動の変化によって規定されてきました。本稿では、経済学的視点に基づき、政治経済学的研究、需給モデル、消費者選好モデルの三つの側面から植物油研究の先行研究を整理し、今後の研究課題を展望します。

1. はじめに

植物油には、大豆油や菜種油、オリーブ油、ココナツ油、パーム油など多様な種類があります。これらは、家庭での調理油をはじめ、加工食品、外食産業、製菓・製パン分野など、私たちの食生活を支える基礎的な食材として広く利用されています。近年では、植物油を原料とするバイオディーゼル燃料の利用が進むほか、化粧品や医薬品分野でも需要が拡大しており、植物油は食料分野にとどまらず、工業・エネルギー分野においても重要性を増しています。

一方で、植物油をめぐる生産・流通・消費の構造は、国際価格の変動、貿易政策、気候変動、健康志向の高まりなど、さまざまな要因の影響を受けています。とくに、パーム油生産に伴う森林破壊や、大豆生産拡大による土地利用変化、国際紛争や輸送コスト上昇による市場の不安定化は、環境問題やサプライチェーンの持続性と密接に関係しています。このように、植物油をめぐる課題は、単なる農産物の需給問題を越え、環境・社会・経済が交錯する複合的な問題として捉える必要があります。

こうした状況を踏まえると、植物油の分析には単一の学問分野だけでは十分に対応できません。そのため、これまで植物油に関する研究は、経済学、社会学、食品科学など多様な分野で蓄積されてきました。本稿では、経済学に焦点を当て、とくに、①政治経済学的視点、②需給モデルを用いた分析、③消費者選好モデルの三つの側面から、先行研究の動向を整理します。これら三つの視点は、植物油の生産・流通・消費構造を多角的に理解するうえで不可欠であり、今後の研究を展望する際にも有用な枠組みとなります。とりわけ、本稿で取り上げる三つの側面は、政策議論や企業戦略の分析とも接続しうる点で意義があります。

2. 政治経済学的な研究

植物油を対象とした政治経済学的研究としては、平賀（2019）および張ら（2024）が代表的です。

これらの研究は、植物油の需給や貿易を単なる市場メカニズムとして捉えるのではなく、国家・企業・農家といった主体の力学、さらには国際政治経済構造の変容の中に位置づけて分析している点に特徴があります。

平賀（2019）は、日本の植物油産業の発展を対象にフードレジーム論の枠組みを援用し、近代的な植物油供給体制がいかに形成されてきたのかを明らかにしています。とくに戦後日本における菜種油、大豆油の消費拡大と流通構造の変化に焦点を当て、国内消費の拡大が国際的な原料供給ネットワークの構築とどのように結びついたのかを検討しています。

一方、張ら（2024）は、より広い視点から東アジアの主要国における国家・企業・農家の行動様式に注目し、世界の大豆需給および貿易構造の変化を包括的に分析しています。本書は、中国や日本といった主要輸入地域と、主要輸出国であるブラジルとの関係性に焦点を当て、国際的な大豆経済の構造転換を明らかにしています。本書が対象とする東アジア地域には、樋口（2024）で分析される韓国をはじめ、中国、台湾、日本が含まれます。これらの国々では、経済成長期において、①植物油および飼料用大豆ミールの需要増加、②大豆輸入量の拡大、③国内大豆生産規模の縮小という三つの変化が、ほぼ同時期に生じたことが指摘されています。こうした分析によって、地域ごと的大豆油需給の動向を把握することができるようになっています。

3. 需給モデルによる分析

植物油に関する国際的な需給予測モデルとしては、OECDとFAOが毎年共同で公表する「OECD-FAO Agricultural Outlook（以下、Outlook）」が代表的です。本報告書は植物油に特化したものではありませんが、農業全体にわたる幅広い品目を対象とし、「AGLINK-COSIMOモデル」と呼ばれる部分均衡型の経済モデルを用いて、世界の食料需給を中長期的に分析しています。筆者は2022年から2024年にかけてOECDに派遣され、このモデルのデータ入

力や計算作業に直接関わっていました。同モデルは、経済成長率や人口動態、各国の農業政策、技術進歩といったマクロ経済要因を組み込みながら、主要農産物の生産量、消費量、貿易量および価格動向を体系的に予測する点に特徴があります。

最新の「Outlook」では、植物油に加え、大豆をはじめとする油糧種子やプロテインミールについても、生産、消費、貿易および価格の中期的な見通しが示されています。報告書によれば、2025年から2034年にかけて、世界の植物油市場では引き続き堅調な需要拡大が見込まれています。とくに中所得国では、所得水準の上昇に伴う食生活の多様化や人口増加を背景に、植物油需要の増加が予測されています。また、低所得国においても人口増加が続くことから、世界全体の需要を押し上げる要因になると見込まれています。一方で、アブラヤシやその他の油糧種子の生産については伸び悩む可能性が指摘されており、このことが中期的には植物油価格に対して緩やかな上昇圧力として作用するとの見通しが示されています。

このように、「Outlook」に基づく需給モデル分析は、植物油市場の中期的な動向を把握するうえで不可欠な枠組みであり、国際的な生産・貿易構造の変化を理解するための重要な基礎資料として、政策立案者や研究者から高い信頼を得ています。

4. 消費者選好モデル

植物油の需要分析では、消費者選好に着目した研究も重要です。前節で扱った需給モデルでは、消費者の選好は同一であると仮定され、需要は主に価格や所得によって説明されます。しかし実際の購買行動では、安全性や栄養価、味、産地など多様な属性が考慮され、消費者の評価軸は一様ではありません。このため、製品属性ごとに消費者の選好構造を明らかにする分析手法が求められています。

こうした文脈で注目されているのが、ベスト・ワースト・スケーリング (Best-Worst Scaling : BWS) 分析です。BWS分析は、複数の属性からなる選択肢集合を提示し、最も重視する属性と最も重視しない属性を選択してもらうことで、各属性の相対的重要性を推定する手法です。

植物油にBWS手法を適用した研究は、菜種油を対象とした樋口ら (2026) を除くと、主としてオリーブ油に関する研究が蓄積されています。例えば、Dekhili et al. (2011) はチュニジアとフランスの消費者を比較し、フランスでは味、エキストラバージン表示、公的地理的表示が重視される一方、チュニジアでは味、産地、有機ラベルが重視されることを明らかにしています。さらに、Pérez y Pérez and Gracia (2023) やYagi et al. (2025) な

どの研究を総合すると、国や文化的背景によって重視される属性には一定の差異がみられます。一方で、味、原産地、種類、価格といった製品属性は共通して重要視されるのに対し、パッケージやブランドの重要度は相対的に低いという共通点が確認されます。これらの知見は、植物油の購買行動の多様性と、その背後にある文化的・社会的要因を理解するうえで重要な示唆を提供しています。

5. おわりに

本稿では、植物油をめぐる研究を、政治経済学的視点、需給モデル、消費者選好モデルという三つの側面から整理しました。政治経済学的研究は、植物油の流通や消費を国家政策や国際貿易構造の中で捉えることの重要性を示しています。需給モデル分析は、グローバル市場における中期的な見通しを明らかにしてきました。さらに、消費者選好モデルは、需要の背後にある「選ばれる理由」に着目し、ミクロレベルでの購買行動の多様性を明らかにしています。

今後の課題としては、これら三つの分析視点を統合し、国際的な需給構造の変化が消費者行動にどのような影響を及ぼすのか、また企業や国家の戦略が消費者選好の形成にどのように関与しているのかといった、ミクロとマクロを結びつける研究を進めていくことが挙げられます。あわせて、オリーブ油以外の植物油、すなわち菜種油、大豆油、パーム油などに焦点を当てた消費者分析のさらなる充実も重要であると考えられます。植物油は、食料・経済・環境を相互に関連づけるグローバルな産品であり、今後も多角的な視点からの研究の深化が期待されます。

【引用文献】

- Dekhili, S., L. Sirieix, and E. Cohen (2011) How Consumers Choose Olive Oil: The Importance of Origin Cues, *Food Quality and Preference* 22 (8) : 757-762.
- Pérez y Pérez, L., and A. Gracia (2023) Consumer Preferences for Olive Oil in Spain: A Best-Worst Scaling Approach, *Sustainability* 15 (14) : 11283.
- Yagi K., G. Maesano, G. Li, and M. Canavari (2025) Olive Oil Preferences Among Japanese Consumers: Best-Worst Scaling on Country of Origin and Consumer Heterogeneity, *Agribusiness*.
- 張馨元・八木浩平・林瑞徳編 (2024) 『大豆の政治経済学：フードレジームの視点から』筑波書房。
- 樋口倫生 (2024) 「第3章 韓国大豆産業—輸入大豆からの接近」張・八木・林編 (2024) 所収。
- 樋口倫生・張馨元・八木浩平 (2026) 「中国成都市における菜種油の消費者選好 —ベスト・ワースト・スケーリングによるアプローチ—」『農村経済研究』44 (1) 掲載予定。
- 平賀緑 (2019) 『植物油の政治経済学—大豆と油から考える資本主義的食料システム—』昭和堂。